

めざす児童生徒像

学びに主体的（一生懸命）に関わり合う児童

※児童生徒結果－教員結果・保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果（％）			※差	達成状況の分析	改善策
				教員	児童生徒	保護者			
（学校で設定）	理念の実践	①の値を90％以上にする。	① 学びに主体的に関わり合う児童の育成に努めている。	100 A:76 B:24	91 A:64 B:27	97 A:61 B:36		いずれも肯定的な回答が100％であった。教師のAの積極的で肯定的な回答をもう少し増やしていきたい。	教師のAの積極的で肯定的な回答を増やすために、生徒指導の4つの視点を生かした声掛けを引き続き取り組んでいきたい。また、子どもに委ねる場面をもっと増やしていきたい。
			② 危機管理意識を高め、安心安全な学級づくりに努めている。	100 A:84 B:16					
			集計						
	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目				達成状況の分析	改善策
石川県共通重点項目	働き方や業務の改善	③の値を90％以上にする。	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	100 A:23 B:77				③の肯定的な値は90％以上になったが、まだ十分ではないと思われる。	教材研究・研修の時間を確保するため、意識的に時間の確保をしていきたい。例えば、特別日課の日には会議を入れない等、教務と連携していきたい。
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	100 A:46 B:54					
			③ 組織として教材研究・研修の時間を確保している。	91 A:61 B:30					

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果（％）			※差	達成状況の分析	改善策
					教員	児童生徒	保護者			
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	③の値を90％以上にする。	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元（授業）構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	91 A:53 B:38				③の肯定的な値は100％であったが、A評価の割合を増やしていきたい。	③授業整理会で実際の授業と構想内容のズレを共有し合い、改善のヒントとする。
				② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	91 A:53 B:38					
				③ 授業改善への共通した取組(授業構想シートの活用)を確実に実践している。	100 A:46 B:54					
				集計						
		「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	②の児童の割合が中間…70％以上 年度末…80％以上	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	100 A:7 B:93	92 A:60 B:32			②の肯定的な値は教員・児童生徒共に91％と高く、話し合い活動が授業に定着し、一定の学習効果を感じていることがうかがえる。一方で、Aと評価した教師と児童との割合に大きな差がある。	②教員が「A評価」と感じられる基準を明確にし、「深まりが見られる話し合い」の具体例を共有する場を設ける。 ②話し合いで学びが深まったり、広がったりする場面では、教師がその良さを言葉にして伝えることで、児童に気づきを促し、自分たちの学びの深まりや広がりを自覚できるようにする。
				② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	91 A:15 B:76	91 A:69 B:22				
				③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	76 A:0 B:76	88 A:50 B:38				
				④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えている。	67 A:7 B:61	88 A:56 B:32				
				⑤ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	100 A:15 B:85	87 A:58 B:29				
				⑥ 児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	84 A:23 B:61	95 A:70 B:25				
				⑦ 子供が自ら学びに向かうような授業づくりに取り組んでいる。	100 A:38 B:62					
				集計						
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	③の割合が中間…85％以上 年度末…90％以上	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	100 A:46 B:54				①以外の項目は、肯定的評価は高いものの、教員のA評価の割合が3割程度と少ない。	②地域の実態を捉え、昨年度の記録をもとに、地域のよさや人材を活用しながら実践を続けていく。また、学校に合わせた教育過程を考え、改善の視点をもってカリキュラムマップに加筆修正をしていく。 ③⑤学力調査の正確な結果をもとに、授業作りや帯タイムなどの共通実践を継続して取り組む。 ④小中連携協議会のテーマが明確になり、タイピングでは中学と連携できている。夏季休業中の小中連携協議会で、学力調査の分析の情報交換を行ったので、記述力の向上・基本的な概念の理解などを南部校区の共通した課題として、改善を目指した授業作りを行う。
				② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	100 A:23 B:77					
				③ 全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	100 A:38 B:62					
				④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。（小中連携）	92 A:23 B:69					
				⑤ 学力調査の分析を生かして帯タイム学習等の充実を図る。	91 A:30 B:61					
		学習方法	③の値を80％以上にする。	① 児童生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動を行っている。	91 A:30 B:61	84 A:39 B:45			教員の肯定的評価が高いが、児童1割程度は否定的な評価をしている。保護者の評価からみても、1割の児童は学習用端末を使えていない可能性がある。	Chromebookに変わるため、うまく使えていない児童にも再度使い方を新しく一斉に指導する機会があるので、同じペースで進めることができるようにする。家庭学習では、1学期は2週間に1回程度の持ち帰りだったが、1週間に1回の持ち帰りを目指し、学校でも家庭でも学習に活用できるようにしていく。
				② 児童生徒が自分の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面では、児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を活用している。	91 A:61 B:30	86 A:65 B:20				
				③ 家庭学習で学習用端末を自分で使えているか	91 A:53 B:38	90 A:78 B:12	89 A:44 B:45			
				集計						

令和7年度小松市立粟津小学校 学校評価2

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・8月提出）	取組の成果と課題（年度末・3月提出）
生徒指導	児童が主体となって、みんなで活動する学校づくりを推進する。	・7月のアンケートでは、「学校が楽しい・どちらかといえば楽しい」と答えた児童が94.2%、「みんなで何かするのが楽しい・どちらかといえば楽しい」と答えた児童が97.1%とどちらも高い数値だった。これらは、各委員会の企画や、6年生を中心とした毎月の児童集会での「お楽しみ会」など、児童が自ら進んで企画し実行した結果だと考える。2学期以降も児童主体の活動を進めていく。 ・委員会の活動内容を掲示したり、児童集会で毎回めあてを共有したことで、下学年も率先して企画に参加したり、めあてを意識して活動したりできた。 ・南部中学校校区では、今年度なんぶっ子3ヵ条のうち「あいさつ」を重点において取り組んでいる。他校の取組も共有しながら、自校に生かしていきたい。	
	・毎月の児童へのアンケート結果を元に、各学年での目標や取組を決める。  ・毎月の児童集会の活動のふり返りやなかよし議会での話し合いを通して、運営委員会や6年生が主体となって活動を考える。  ・南部中学校校区で連携し、児童の視点で魅力的な学校づくりに向けて取組を考え、共に実践していく。		
特別支援教育	児童一人一人の教育的ニーズに応じた教育を推進する。	・児童理解の会を通して、校内支援全体会にて全職員で児童の実態や変化について共有することができた。必要に応じて校内支援会議を開催した。 ・特別支援学校からの専門相談員を1学期は6回派遣依頼した。専門相談員に授業を参観してもらい、様々な視点から支援の方向性を探ることができた。学校でできる支援、家庭でできる支援等の助言をもらい、家庭の理解・協力を得ることができた。 ・児童の教育的ニーズや保護者のヒヤリングを通して、視覚支援や放課後個別学習、通級等の個に応じた支援体制や情報提供を続けていきたい。	
	・組織的な特別支援教育を推進を推進するため、コーディネーターを中心に現状を把握、評価した上で、児童の支援策を共有し、継続した支援が行えるよう毎月の児童理解の会や支援会議を通して校内の支援体制を整える。		
道徳教育	日常生活で生きて働く道徳科の授業づくりを推進する。	・夏休み中に低学年・中学年・高学年に分かれる教材研究の場を設けるよう発信した。同じ内容項目を見つけ、ペア学年分の教材研究を行い、授業案や教材教具を共有することで、2学期の授業準備に生かしていく。 ・全学年で振り返りの道徳ノートを活用している。教師が価値観を押し付けるのではなく、児童の振り返りに寄り添うコメントを継続していきたい。 ・1学期は行事と道徳の学びのつながりの意識付けが弱かった。2学期には秋の遠足や運動会が控えているので、行事と道徳的価値とを結びつける言葉かけを積極的に行うよう、担当が働きかけていく。	
	・多面的、多角的な見方へと広げる指導を目指し、年に2、3回、低・中・高で同じ内容項目を教材研究する場をもつ。  ・道徳科の学習活動において、授業中の観察や会話だけでなく、振り返りの道徳ノートの記述などを活用し、自身の変容を実感できるように関わる。  ・児童が学びを実感できるよう、避難訓練や運動会など、様々な行事の折に、道徳的価値を伝えたり、振り返ったりすることを呼びかける。		
体育健康教育	自らの身体や健康に関心を持ち、健康増進にむけた生活づくりを推進する	・5月に4～6年生を対象に行ったアンケートより、体育の授業について「楽しい」「やや楽しい」と肯定的回答した児童は92.6%と多かったが、授業体育以外の運動習慣に関する質問について、「運動しない」と回答した児童37.7%と他の回答よりも最も多かった。 ・6月にメディアコントロール週間(にこプロ)を実施し、メディアの使い方について家庭で話し合い、めあてを設定し、達成できるように取り組んだ。同時期に実施した生活アンケートより、22時以降に就寝する児童の割合は平日23%、休日39%。朝食欠食する場合がある児童の割合は平日11%、休日16%であり、休日に生活リズムが崩れる傾向にある。 ・4月、6月の健康診断時に養護教諭よりミニ保健指導を実施した。また、6月には各学年に発達段階に応じた歯科指導を実施した。	
	・自らの生活習慣や運動習慣について振り返る機会を設ける。  ・学級担任と養護教諭が連携し、計画的に保健指導を実施する。		
情報教育	GIGAスクール構想の推進	・6月に2週間のタイピング週間/タイピング大会を実施し、児童のタイピング技能の向上を図った。結果、「学校DX推進に向けた目標指数」を対象学年は大きく上回っており、一定の成果が得られたと考える。2学期も引き続き、表彰等を生かした意欲の喚起を行いながら実施していきたい。 ・OneNoteを活用した粟津小プラットフォームを作成し、全児童に配備した。乱立するアプリケーション（QubenaやTeams）や学習用WEBブラウザ（Canvaやタイピングサイト等）、学びの足跡（算数）へのアクセスが簡単にできるようになり、学習効果の向上が見られる。しかし、周知不足で一部の学年でうまく活用されていない実態あるため、引き続き校内研修等で伝えていきたい。 ・今後、chromebook移行に伴い、端末の効果的な活用研修を2学期以降積極的に行っていきたい。	
	・GIGA校内年間研修計画に沿って、TeamsやCanva等の導入、定期的なタイピング週間/グランプリの実施を通して児童のスキルの向上や、端末の効果的な活用を目指し、提案していく。 ・One Noteを活用しての粟津小プラットフォームを全学年に配備し、算数の足跡やその他学習に必要なアプリケーションへの接続をより直感的に行えるようにし、授業等で活用していけるようにする。		

学校関係者評価	
---------	--